

論文内容の要旨

氏名	平井 大輔
論文題目	An Analysis of Elliptical Phenomena Based on Non-Constituent Deletion (非構成素削除に基づいた削除現象の分析)
要旨	<p>本論文は、生成文法理論、主に Chomsky (1993) により提唱された極小主義者プログラムの枠組みに基づき、英語の削除現象、特に、削除と共に残余要素が現れる間接疑問文削除、多重間接疑問文削除、疑似空所化の3つの削除現象の派生方法について、新たな分析を探究している。本論文は英語で書かれ、全6章で構成され、総頁数はA4版vi+216頁である。</p> <p>本論文では、特に Chomsky (2001) などで議論されている強い極小主義者のテーゼ(Strong Minimalist Thesis (SMT)) を作業仮説として採用し、その派生方法について新たな分析を提案している。SMTは、「人間は遺伝的に言語に特化した言語器官を持っている」と仮定し、その言語器官はどの程度まで他の認知システムに対して最適になりうるのかを問うている。従来、削除操作は統語的構成素に適用されると考えられているため、上述の削除現象における残余要素は削除操作の適用から逃れるために、削除領域外へ何らかの移動操作を受けると分析されてきた。しかし、SMTの考えに従えば、これまで提案されている残余要素の移動操作の適用方法について、妥当な説明が行われているとは言えない。</p> <p>そこで、本論文では間接疑問文削除、多重間接疑問文削除、疑似空所化を統語論的、意味論的に分析し、それらにおける残余要素は、派生内において拡大投射原理 (Extended Projection Principle (EPP)) 素性などの要請がない限り移動操作を受けることなく、関連する演算子や素性によって束縛や指標 (解釈) を受けることを提案する。その上で、上述の削除現象は「LFパラレリズム」と前提部分の削除を要求する「最大削除効果」により説明されると主張する。この分析により非構成素に対する削除操作の可能性を示唆している。</p> <p>本論文の構成は以下の通りである。第1章では、まず生成文法理論の基本的概念と理論が目指す目標を概観し、人間が持つとされる普遍文法 (Universal Grammar (UG)) の考えを説明している。さらに、人間の言語能力の解明には、観察可能な経験的事実を詳細に分析することで可能となるという考えを踏まえ、英語の様々な削除現象を提示し、間接疑問文削除、多重間接疑問文削除、疑似空所化を本論文で取り扱うことを述べる。</p> <p>第2章では、本論文の枠組みとなる極小主義者プログラムで考えられている派生のシステムを説明する。従来、生成文法理論では、意味と音声の内容を持つ言語表現を作り出す言語器官が人間に備わっていると考え、それは独立して機能するが、言語に関わる他の認知機能に適切な情報を出来るだけシンプルな方法で提供するように機能すると考えられている。この認知機能は、発音を扱う感覚運動システムと意味を扱う概念意図システムとされ、それぞれ音声形式 (PF) と論理形式 (LF) というインターフェイスを介して言語器官と接している。このようなシステムを基に、近年の枠組みで仮定されている併合操作 (Merge)、</p>

コピー理論 (Copy Theory)、改竄禁止条件 (No Tampering Condition)、探査/目標与値システム (Probe-goal Valuation)、フェイズ不可侵条件 (Phase Impenetrability Condition) などの各概念を用例と共に解説している。第2章の後半では、削除現象に関する2つの基本的分析であるLFコピーアプローチ (Williams (1977)等) とPF削除アプローチ (Hankamer and Sag (1976)等) をVP削除を例に概観している。概略、LFコピーアプローチは、後続文 (表現上の削除文に相当する) には削除部分に空構造が存在し、語彙要素を持つ先行文の対応する意味内容がその空構造にコピーされると考えている。一方、PF削除アプローチは、対象となる構造を一度統語部門内で構築し、PFで削除操作を適用すると考えている。本章では、LFコピーアプローチは派生の際に計算上の負荷がかかる可能性があり、問題となることを指摘している。次に、間接疑問文削除に関する Ross (1969) や Merchant (2001) の議論を概観し、削除部分には可視的要素が存在していたと仮定する方がよりエレガントで妥当な分析が可能であることを述べる。さらに、PF削除アプローチを基に Fox (2000) で提案されたLFパラレリズムの基本的な考え方を導入し、削除部分の適切な解釈のために、先行文と後続文が同じLF構造を持っているときのみ、削除が可能となるという考え方を説明する。

第3章は、間接疑問文削除の派生方法について新たな提案を行っている。Ross (1969) は間接疑問文削除において、削除されるTPが統語的「島」を有しない時には可視的に現れていなくても文法的となるが、TPの内部に島を持つ場合は、可視的に現れれば非文法的になると指摘している。本章では、この現象に関して、LFコピーアプローチの Chung, Ladusaw, and McCloskey (1995) とPF削除アプローチの Merchant (2001) や Fox and Lasnik (2001) を概観し、SMTの枠組みの下では、どれも理論的、経験的に問題となることを指摘する。その代案として、本章では以下のように仮定し、間接疑問文削除の分析を行う。まず、Baker (1970) の抽象的疑問形態素 (Q形態素) を援用し、Q形態素はC主要部に位置し、英語のようなwh句移動を有す言語では、wh句と音声的に隣接することを要求すると仮定する。経験的事実を観察すると、可視的なwh句の移動は下接の条件に従うが、移動していないwh句や不定名詞句はそのような制限を受けることなく、文全体に対して広い解釈を取ることが可能であることがわかる。この事実は、Kuroda (1965) や Heim (1982)らに従い、不定名詞句や存在数量詞を伴う名詞句、wh句は不定要素であり、対応する演算子によって束縛され解釈を受けると仮定し、Q形態素や存在演算子は下接の条件、またフェイズ不可侵条件に関わることなくそれぞれの変項を束縛することによると説明する。

次に、FoxやMerchantの考えに従い、音声的削除は削除を含むLF構造が先行文のそれと同一の場合にのみ認められる (LFパラレリズム) と主張する。この条件の下に、削除操作は、焦点要素以外の前提とされている要素に適用される (最大削除効果) と提案する。通常、間接疑問文削除は、先行文に不定名詞句が含まれ、統語的島の有無に関わらず、その要素の存在が前提とされ、後続文のwh句はその不定名詞句の内容を問うものである。従って、先行文の不定名詞句は存在演算子によって、また、wh句はQ形態素によって、同様に束縛されると考えられる。これにより、先行文と後続文のLF構造は共に同じ位置に演算子と変項を持つという点でパラレルになる。しかし、異なった種類の演算子と変項を持つという点では厳密に異なる。そのため、その異なる要素は焦点化 ([F]マーク) されると考え

る。そうすると、該当する TP は LF パラレリズムを満たし、最大削除効果により F マークされた要素以外の前提要素が削除されることになる。その結果、間接疑問文削除における wh 句は EPP 素性などの他の要請がない限り、CP には移動せず、元位置で Q 形態素によって束縛され、同時に Q 形態素の音声的隣接性を満たすことができる。このような方法により、最終的に間接疑問文削除が正しく派生される。この分析では、これまでの先行研究で見られた島を超えた wh 移動を仮定することなく説明することが可能になる。さらに、この削除分析は、間接疑問文内に VP 削除が含まれ助動詞が残留する場合の非文法性も説明できることを提示する。この分析により、間接疑問文削除は wh 句の移動の後、統語的構成素に適用されるという従来の説明とは異なり、非構成素に削除が適用されることによって派生されるという新しい分析を提示している。

第 4 章では、多重間接疑問文削除の派生に関して、上述の分析を用いて新たな説明を提示する。英語の wh 疑問文では、複数の wh 句の前置は許されず、1 つの wh 句のみが文頭に現れる。そのため、削除は統語的構成素に適用されるという仮定のもとでは、複数の残留 wh 句がそれぞれ何らかの移動操作を受け削除領域から取り出されなければならない。本章の前半部分では、2 つ目の wh 句の移動に関する先行研究として Richards (2001) および Lasnik (2014) を概観する。彼らは、それぞれ異なった移動方法を提案しているが、どちらの説明もいくつかの問題を含んでいることを指摘する。

第 4 章の後半部分では、代案として間接疑問文削除で行なった分析を用い、多重間接疑問文の新たな派生方法を提案している。通常、多重間接疑問文削除では、wh 句の答えとしていわゆるペアリスト読みが好まれる。つまり、この構文において先行文は、ペアとなる特定性の高い不定の物や人が存在することを含意し後続する wh 句を含む文に対して前提となる意味内容を有する一方で、後続する文の wh 句は、対応する不定名詞句の内容を問う役割をしている。このような点から、多重間接疑問文の先行文において、存在演算子が複数の不定名詞句を非選択的に束縛し、一方の後続文では、ペアリスト読みの答えを保証するため、存在演算子による不定名詞句の束縛関係と平行に Q 形態素が wh 句を非選択的に束縛すると考える。この場合も、wh 句は T 主要部にある EPP 素性の要請がない限り、移動することなく元位置で Q 形態素に束縛されると考える。これにより、先行文と後続文の LF 構造は、先に示した LF パラレリズムを満たすことができる。間接疑問文削除と同様に、この場合の wh 句も異なる変項であるため焦点化されると考える。その wh 句を含む構造に上述の最大削除効果が適用されることにより、前提要素が削除され、複数の wh 句が残余要素として残る。この削除操作により、Q 形態素と wh 句が隣接し Q 形態素の条件が守られることによって、適切な多重間接疑問文削除が派生される。次に、多重間接疑問文削除のもう一つの特徴である wh 句の同節性 (clause-mateness) について考察している。間接疑問文削除に見られる現象と数量詞 every が関わる現象を詳細に比べると、2 つ目の wh 句は多重疑問文における wh 句と異なり、音声的強勢を受け、さらに every を含む名詞句の作用域に関する事実と非常に似た振る舞いをするのが観察される。そこで、2 つ目の wh 句は every のような強い数量詞と同様に、最小の CP 内で Q 形態素に束縛されなければならないと仮定することにより同節性の説明を行なっている。本章で提案した分析により、残留 wh

句の複雑な移動操作を特に設ける必要なくこの構文の派生を説明でき、さらに、間接疑問文削除と同様に、非構成素の削除が関わっていることを示唆している。

第 5 章は、LF パラレリズムと最大削除効果に加え Chomsky (2001) での目的語転移の分析を適用し、擬似空所化の派生について新たな分析を提案する。この構文では、通常動詞の目的語が残余要素となるが、従来の構成素削除を基にするとそれがどのように削除領域から移動するのが議論の中心となっている。しかしながら、これまで行われた分析 (Jayaseelan (1990) および Lasnik (1999)) では、その移動に関して十分に説明がされていない。本章では、その代案として、Chomsky (2001) で行われた目的語転移に関する考え方と周辺 (Peripheral (P)) 素性による焦点化の方法を用いて、LF パラレリズム、最大削除効果および非構成素削除を基に分析を行なっている。

目的語転移に関して、Chomsky (2001) は、(1) v^* は新しい出力が構築される場合にのみ、EPP 素性が与えられる。(2) v^* の指定部には焦点化や話題化などの意味 (Int) が与えられる。(3) v^*P 内において v^* の補部にある要素以外に音声的要素が無い場合は無標の意味 (Int') が与えられる、としている。(3) については、変数であり英語の場合はこれに従わないと考えている。そのため、英語では目的語が外的併合された後、その位置で焦点化や話題化などの意味(Int)の付与が自由に行われるとしている。しかし、擬似空所化構文では、残余要素は焦点化の解釈を持つため、何らかの方法で元位置の要素に Int を与えなければならない。そこで、焦点化などの有標の意味を保証する P 素性が関連する要素に付与されると仮定する。P 素性は、 ϕ 素性と格素性の関係性と同様に、焦点化の解釈と関連し、焦点要素の P 素性の一致によって、Int を与えると考ええる。また、擬似空所化の派生では、 v^* が解釈不可能素性 [-P] を、残余要素が [+P] を有しており、探査・目標要素の関係で Int が与えられると考える。このシステムの下では、擬似空所化の後続文における残余要素は元位置で焦点化され、先行文においても、残余要素に対応する要素は対比的に焦点化されるため、移動することなく P 素性により同様に焦点化される。次に、削除操作の適用方法について説明する。先行文の v^*P はそれが表す出来事があったことを示し、それに関与した人や物の存在を含意するため、その v^*P が後続する v^*P の前提となる。フェイズ不可侵条件により、その次のフェイズで評価、解釈を受けるが、それぞれの主語は TP に移動しているため、 v^*P の LF 構造は共に同じ位置に焦点化を受けた残余要素を含む平行な構造になり、LF パラレリズムを満たす。前提とされる後続文の v^*P は焦点要素を含んでいるため、それを除いた前提要素が最大削除効果により削除され、最終的に擬似空所化が派生されると説明する。続いて、ここでの分析と Chomsky (2001) で提案された最大一致効果 (Maximal Matching Effect) を基に、二重目的語構文と与格構文を含む擬似空所化の僅かな文法性の説明を試みている。このような考察から、擬似空所化においても残留要素は移動することなく、非構成素を削除することによって、この構文が派生されるという分析を行なっている。

第 6 章は、本論文のまとめと結論を述べている。本論文は、一貫して、LF パラレリズムと最大削除効果を用いて 3 つの削除現象を説明し、削除操作は構成素に適用されるというこれまでの考え方と異なる新たな提案を行なっている。

論文審査の結果の要旨

氏名	平井 大輔
論文題目	<p style="margin: 0;">An Analysis of Elliptical Phenomena</p> <p style="margin: 0;">Based on Non-Constituent Deletion</p> <p style="margin: 0;">(非構成素削除に基づいた削除現象の分析)</p>
要 旨	
<p>本論文は、N. Chomsky によって提唱された生成文法理論、とりわけ 2000 年代初頭の極小主義者プログラムの枠組みで、英語の 3 つの削除現象（間接疑問文削除現象、多重間接疑問文削除現象、擬似空所化現象）を取り扱い、その意味的な特性と統語的な特性を明確にした上で、それらを統一的に説明するための新たな分析を試みたものである。</p> <p>本論文の内容は、各種の学会や学術誌においてすでに公表されたものに基づいている。まず、3 章で議論されている間接疑問文削除現象の一部は、金星堂で出版された『生成文法の軌跡と展望』(2014 年) 等に発表されている。また、4 章で分析されている多重間接疑問文削除現象の一部は、日本英語学会 2016 年度の年次大会で口頭発表され、同学会発表要録集 <i>JELS</i> (2017 年) に掲載されている。さらに、5 章の擬似空所化現象の一部は日本英文学会中部支部第 53 回大会 (2001 年) や日本英文学会第 74 回大会 (2002 年) 等で口頭発表されており、日本英語学会機関誌 <i>English Linguistics</i> 21.2 (2004 年) にも掲載されている。このように本論文の中心部分である 3 章から 5 章の内容は、すでに関連する学会や学術誌等で審査を受け、発表されたものである。したがって、本論文は各種学会等ですでに高い評価を得ており、博士論文に相応しい水準に達しているものと判断される。</p> <p>ここで、本論文の評価すべき主要な点を 4 つあげておきたい。まず第 1 に、本論文では上記 3 つの削除現象に関連する先行研究の分析方法やそれに伴う仮説・仮定等の妥当性を詳細に吟味した上で、それらの問題点を明確にしている。本論文で議論されている削除現象は 1960 年代後半より多くの研究者によって分析されており、様々な提案がなされている。本論文では、それらの分析を LF コピーアプローチと PF 削除アプローチに分類し、申請者独自の視点でその妥当性と問題点を的確に明らかにしている。</p> <p>第 2 に、先行研究に見られるこれらの問題点を解決するために、独創的な提案を行い、それによって 3 つの削除現象を論理的に矛盾することなく適切に説明している。具体的には、Baker (1970) の抽象的形態素(Q)を援用し、(1)その形態素と wh 句は音的に隣接しなければならないこと、また(2)削除現象において、その形態素は移動していない wh 句を非選択的に束縛することを提案している。また、削除操作に関しては、(3)先行文と後続文の間に LF 構造のパラレルリズムが存在し、さらに(4)後続文の前提とされている表現で焦点化された要素以外のものに限り、その操作が適用されることを提案している。特に、(4)の削除操作は非構成素を削除することを意味し、これは従来の「削除操作は構成素にだけ適用される」とする考え方と全く異なる独創的な提案となっている。また、これらの提案を用いた説明方法は論理的であり適切なものである。</p>	

第 3 に、本論文には説明の一貫性が見られる。一般に、言語研究において複数の言語現象を説明する場合、それぞれの現象に対して別々の仮定や提案を行う傾向がある。これは本論文で取り扱われている 3 つの削除現象でも同様である。すなわち、これら 3 つの削除現象は表面的には全て削除を伴うものであるが、細部においては異なる言語現象である。したがって、先行研究では、これらの 3 つの削除現象をそれぞれ特有の仮定や提案を用いて説明する傾向がある。しかしながら、本論文では上述の(1)-(4)の提案を行い、実質的に異なる削除現象を統一的に説明している。具体的には、間接疑問文削除現象と多重間接疑問文削除現象では、上記の(1)-(4)の提案を用いて当該の構文の統語的派生方法を提示し、それらの意味的な特性や統語的な特徴を説明している。また、擬似空所化現象では、上記の(3)、(4)の提案と Chomsky (2001) の目的語転移を用いて、この構文の統語的派生方法を示し、その意味・統語論的な特性を説明している。このように、(1)-(4)の提案を用いて 3 つの削除現象を適切に説明して、その説明には一貫性が見られる。

第 4 に、本論文でなされている提案の妥当性に関連する言語現象において論証している。例えば、間接疑問文削除では前置詞を伴う *swiping* や、VP 削除と助動詞残留を伴う文等に適用し、多重間接疑問文削除では同節性に関連する事例等に適用し、そして擬似空所化では二重目的語構文と与格構文等に適用することによって、その妥当性を論証している。

本論文にはこのように評価すべき点があるが、問題点がまったくないわけではない。まず、削除操作が LF 構造のパラレルリズムに依存している。極小主義者プログラムでは、統語論、LF 部門、PF 部門は独立していて、お互いに依存関係にはないと仮定されている。しかし、本論文では、先行文と後続文の LF 構造がパラレルであることを条件に PF 部門の削除操作が適用される、と仮定されている。このような仮定は、特に、削除現象の分析にはよくなされるものである。本論文だけの問題ではない。しかし、LF 部門と PF 部門を関係づけることなく削除現象を説明できれば、その方が好ましいであろう。また、本論文では、削除現象を示す先行文と後続文の LF 構造のパラレルリズムを重視しているが、その LF 構造の前提部分に[F]とマークされた焦点が含まれている。一般には、前提部分は既知情報から構成されるので、そこに焦点が含まれることに多少の違和感がある。

しかしながら、これらの問題点は英語の削除現象の分析・説明に何らかの形でつき纏うものであり、本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文は博士(英語学)の学位を授与するに値する内容を有したものである。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	大庭 幸男
副査	教授	岡田 伸夫
副査	教授	岡田 禎之

最終審査の結果の要旨

氏名	平井 大輔
試験科目	
判定	<input checked="" type="checkbox"/> 合格 ・ <input type="checkbox"/> 不合格
要旨	
<p>学位申請者の研究成果を確認し審査するために、2019年1月30日に博士論文の内容を中心に口述試験を実施した。</p> <p>まず申請者により、博士論文において採用されている N. Chomsky の極小主義者プログラムの枠組みと規則・原理・仮説等が概説されたのち、英語の VP 削除に関する先行研究を検討した結果、VP 削除現象を含む削除現象全体を説明するためのより適切な分析方法の方向性が提示された。その後、英語の間接疑問文削除現象、多重間接疑問文削除現象、擬似空所化現象の意味的な特性と統語的な特性を説明するために、上述の 4 つの提案とその必要性が説得的な方法で示され、当該構文の統語的派生方法の説明が行われた。次に、審査員からこれら提案と構文の統語的派生方法について様々な観点から質問が行われた。</p> <p>申請者は、それらの質問に対し、明確に、かつ、的確に答えることができた。また、その質疑応答により、申請者が上述の削除現象に対して適切な提案を行い、当該構文の妥当で論理的に矛盾のない統語的派生方法を提示していることが確認できた。</p> <p>申請者の外国語の試験については、英語により執筆された学位論文と日本語、英語、中国語による要約における高い表現力と理解力から判断して試験を免除した。</p> <p>以上の諸点を総合的に、かつ、慎重に判断した結果、審査委員会は本博士論文に対し全員一致で博士(英語学)の学位授与を適格と認め、合格と判断した。</p>	

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	大庭 幸男
副査	教授	岡田 伸夫
副査	教授	岡田 禎之